

直線、切断、接合、螺旋

ある知的障害をもつ人の旅をめぐる考察を通じた、世界の〈変革〉にむけた試論

猪瀬 浩平

(PRIME 所員)

1、はじめに

本稿の目的は、理性中心主義を相対化することにある。もちろん大それたことはなかなかできない。障害のある人たちをめぐる言説を祖上にあげ、それが理性中心主義から脱していないことを指摘する。その上で、知的障害のある人の一見〈非—合理〉に見える行動に巻き込まれていく筆者自身の経験の考察を通じて、理性中心主義とは別の思考の回路を拓くことを目指す⁽¹⁾。

1-1 障害の社会モデルとその批判

「障害」を個人の属性として捉え、専門家の介入によってその克服軽減を図る生物医学に対して、社会学による「障害」研究は、ラベリング理論、ステイグマ論、そして近年登場した障害学にいたるまで、「障害」を社会によって構築されるものとして捉えてきた。彼らによれば、障害とはある社会的文脈の中に存在する。障害とは、障害（とされるもの）を捉える認識のあり方、障害（とされるもの）を健常（とされるもの）から分離しようとする価値観なくしては存在しえないのである〔スコット1992；ゴッフマン2001；Oliver1990〕。

障害者運動を源流とする、イギリスの障害学において、中心的論客となる M. オリバーと V. フィンケルシュタインは、マルクス主義の影響が色濃

く見られる。彼らは歴史についての唯物論的アプローチを採用し、障害を西洋社会の産業化の副産物として捉える〔Oliver1990；Finkelstein1980〕。産業革命以前、身体的損傷 *impairment* をもった人間は、地域社会の関係性から疎外されていない。しかし機械化がもたらす工業社会になると、効率的な生産活動に寄与するものとして健全な身体 *able-body* が重視されるようになる。同時に生産の効率性を妨げる身体的損傷をもった人間は、労働市場から排除される。彼らは、医療・福祉専門家による支援の対象になり、治療の方法の選択のみならず、生活の全般にわたって専門家に依存し、その主体性を剥奪されるようになる。福祉制度の拡充も、逆説的に障害者と健常者との隔離を補強する。このような産業化がもたらす共同体や労働からの疎外と、専門家支配の結果、障害者の隔離／排除を自明視するイデオロギーが生まれる。そして、障害者がいないことを前提に労働や生活、教育の現場が整備されていく。

オリバーらは近代産業社会の政治—経済的状况をこのように整理した上で、政治—経済的状况を無視し、個人の身体的損傷にのみ焦点を当て、障害の克服・軽減にのみ専心してきた立場を「個人モデル」、「医療モデル」と呼び、障害者に対する専門家の支配として糾弾する。これに対して彼らは、障害を構築する政治経済的システムの変容を求める自らの立場を「社会モデル」と呼ぶ。

1-2 社会モデルへの批判

オリバーらの社会モデルに対して、フェミニズムの立場から批判が投げかけられる。J. モリスは、オリバーが社会的に構成される障害のみを重視し、身体的側面として存在している損傷を問題にしない点に、疑問を投げかける。

環境的障壁と社会的態度が障害をもたらすとする社会モデルは、差異や制約が完全に社会的に構成されているとすることで、身体的な経験を捨象してしまう傾向にある。確かに環境的障壁と社会的態度は、障害者の経験にとって重要な位置を占めるが、全てが社会的に構成されるといった時点で、身体的・知的制約、病気、死の恐れに対する個人的経験を否定することになるだろう。J. モリスはこのように語る [Morris1991: 10]。

モリスの主張は、集合的アイデンティティや一般化・抽象化された「障害」ではなく、経験の個別性、身体＝身体的損傷の具体性を重視するものである。しかし彼女は、障害当事者が、否定的なものを含めて感情を重視することの重要性を指摘する段階にとどまっている [杉野2002]。その先に見出されるのは、自らの権利を主張する合理的行為者の運動により、偏見は打破されうるという社会観である。「障害者＝権利者」という一元的な設定は、モリスが批判するオリバーらにも共通するものである [Shildrick & Price 1996: 96]。

障害 *disability* の経験は、身体的損傷をもつ障害当事者にだけ専有されるものではなく、身体的損傷をめぐる人、知識、人工物の多元的折衝の中にこそ、定位されるものである。われわれは、マクロな社会構造から障害 *disability* の構築を語るオリバーへの批判を、モリスのように障害当事者の個別の経験に求めるのではなく、またオリバー／モリス双方が行うように障害者を「権利をもった能動的行為者」として一元的に設定するのではなく、医療的、制度的言説（＝政策）をあくまで一つの要素としながら、身体的損傷をめぐる具体的

な組織環境の中で社会的実践が再生産される過程を、ミクロな状況に即して、統合的に記述していく枠組みを探索する必要がある。

1-3 本稿の目的

以上の猪瀬によるいささか生真面目な批判は、埼玉の東部地区で障害者運動を展開してきた山下浩志が引用する障害当事者八木下浩一の言葉になれば、「社会モデルはかっこよすぎる」と言い換えられる⁽²⁾。

本稿は、運動としての社会モデルの意義を評価しつつ、そこで主に問題にされてこなかった（知的）障害をもつとされる人の様々な行為が、社会モデルの枠組みにも、障害者運動の言説にも容易く回収されない形で周りの人々を巻き込み、あるいは周りの人や事物に巻き込まれながら、即時的に生み出し、即時的に解体する中で起こる多元的な組織化のようなものを記述しようと試みる。ここにおいて、人類学「的」記述が行う解釈と、その失敗も俎上にあがる。その上で、社会モデルがいうのとは別の形で、世界が変わってしまう契機が、実は今この瞬間にも遍在していることを指摘する。

2、正月の出来事

2-1 はじめに

さて、我が兄 R 氏は知的障害があり、自閉症であるとも言われている。流暢な言葉話さないし、文字は自分の名前を書くのに限定される。多分文字を読んだりもしないと思われる。

この兄が2014年1月3日夕刻に彼の家のある埼玉県さいたま市にある本屋でいなくなったことから、本稿の議論は始まる。翌日の夜、大阪の天王寺警察で保護しているという連絡が入る。1月3日に埼玉の本屋でいなくなってから、天王寺駅近くのたこ焼き屋（この店の親切なおっちゃんが兄

貴を警察まで連れて行ってくれた)の彼の足取りは不明である。

どこに泊まったのかもわからない空白の一日。

2-2 直線：「帰省」ということ

1月3日、僕は世田谷にある祖母の家に正月のあいさつに行った後、妻の実家である福井県へ行く予定だった。地元の駅で改札を通ろうとすると、有楽町駅の沿線火災があり、京浜東北線、山手線が大幅に遅れていることを知る。そのため、世田谷の祖母の家に行くのはあきらめ、東京駅で新幹線を待つことにした。大幅なダイヤの乱れの中で、なんとか新幹線に乗車し、米原を経由し福井に入った。

翌日は、美浜原発近くにある原子力PR館や敦賀・小浜の寺社仏閣を見て過ごす。そこから妻の親戚のやっている居酒屋に土産をもっていく、そこで日本酒と料理をごちそうになっているところに、僕の携帯に実家の両親から電話がある。

2-3 切断：有楽町駅沿線火災

R氏が祖母の家からまっすぐ帰らなかったのも、僕らの帰省が予定どおりスムーズにいかなかったのも、理由は有楽町駅沿線火災によるものだ。

3日午前6時半ごろ、東京都千代田区有楽町2丁目のパチンコ店などが密集している一角から出火、木造モルタル3階建てのゲームセンターが全焼するなど、建物4棟の計450平方メートルを焼いた。午前9時半現在も消防による消火活動が続いている。東京消防庁によると、けがや人の情報は入っていないという。煙に気づいた通行人からの連絡を受け、有楽町駅の駅員が通報した。

JR有楽町駅周辺の火災の影響で、東海道新幹線はほぼ全線で運転を見合わせていたが、正午

ごろに運転を再開した。また、山手線は全線で、京浜東北線と東海道線は上下線の一部区間で、それぞれ午前6時40分過ぎから運転を見合わせていたが、午後0時53分までにいずれも運転を再開した⁽³⁾。

沿線火災は交通の麻痺を起こし、電車をストップさせた。同時に駅の改札口周辺や再開した新幹線の車内を混乱させ、駅員や車掌の監視の目を曇らせた。結果、沿線火災はまっすぐ家に帰るといふ兄の予定と、まっすぐ親戚の家に帰省するといふ僕の旅程の直線的な進行を切断する。

2-4 接合

電話の内容は「R氏が天王寺警察にいる」というものだった。「関西にいるなら今から迎えに行けるか？」と言う。「福井からだこの時間無理だ」と答えると、「それなら自分が今から迎えに行く」、と家族が言い出す。この時間に埼玉を出ても、大阪で一泊せざるをえない。翌日なら早朝から動けるので、警察に一晚いてもらおうか、と僕は考える。

その瞬間、僕は天王寺が釜ヶ崎に近いことを思いだす。釜ヶ崎で活動しているアートNPO「こえとことばとこころの部屋（以下ココルーム）」とは、2007年以降深い付き合いがある⁽⁴⁾。

ココルーム代表の上田假奈代さんに電話をかけると、すぐつながる。事情を話したところ、「警察一晚じゃかわいそうだから」と迎えに行ってくれることになる。母に電話し、事情を話し、翌日自分らが迎えに行き一緒に帰ることにする。家族が警察に電話をかけ、身元引受について説明する。

ここで上田さんが、埼玉から釜ヶ崎の越冬に参加しに来ている人のことを思い出す。彼は僕の友人の獅子舞師であり、R氏の介助者でもある。代表の上田さんが電話をかけると、彼は電話にでる。20時過ぎなのにもかかわらず宿は決めておら

ず、彼にとっても渡りに船ということで、R氏と一緒にドヤに一泊してくれることになる。そして二人はココルームが運営するカフェで合流する⁽⁵⁾。翌日数年前まで参加していた釜ヶ崎の越冬に、僕は期せずして今年も参加することになった。そして福井の親戚にいただいた土産を出しながら、カフェに集まった人たちとちゃぶ台を囲みながら、正月の里帰りのような昼飯を食べる。餅などを焼き、ニンシ大根などを食べる。食後、R氏がどうやってここまで来たのかをココルームスタッフと話を花が咲く。するといままでずっとだまり、確実に食べ物を摂取していたR氏が、はじめて

「おうち帰ろう」

と言い出す。あまりにも自分勝手な言葉に一同朗らかに笑う。そして大混雑の新大阪駅から、急遽指定席はやめて自由席で席を確保するために奮闘し、なんとか手に入れ、そして東京駅を経て埼玉に戻る。

2-5 解釈

R氏の行動を考えるための予備線を以下に列挙する。

- ・天王寺には6年前に、彼が働く見沼田んぼ福祉農園のメンバーと一緒に2回訪問している（この際、ココルームにもよっている）。その前に、家族でも天王寺周辺エリアには1、2回観光で出かけている。

- ・今までいなくなる際によく行っていたのは亡くなるまでは都内にある祖父の家。祖父が亡くなってからは東京都内繁華街が多い。つまり自分の好きな場所に行くことが多い。これまで一人でもっとも西に行ったのは箱根。西日本行きは今回初めてである。

- ・2012年に開催した日本ボランティア学会（栗原彬代表）の北浦和大会は二日間すべてのプログラムに参加した後、閉会時に混乱にまぎれて旅立ち。そして、なぜか僕の職場のある戸塚駅近くの

ラーメン屋で保護される。つまり家族が話題に上らせるところに行くことがある。

- ・ちなみに旅行中所持金は0円。人に道を聞くことは基本的にしない。もちろん携帯ももっていない。

路線図を読んだり、スマホで駅すばあとを使ったりしない、R氏の認知行動を考えるだけで、いろいろと思考と情動が刺激される。

大火災のために僕の祖母の家での一家大集合は果たせず、一方で妻方一家との出会いは、墓参りも含めて達成された。自分の祖母の家に参加していた兄が発心して西に旅立つことにより、別種の親密性に包まれ、しかも圧倒的な雑種性をもとった「一家団らん」は生まれ、西と東は調停された（妻方祖母、「お兄さんに会えてよかったねえ」と連絡くれる）。

その結果、実家訪問の旅は、僕自身にとっても懐かしい場所へ回帰する旅となった。父母と一緒に埼玉を出た兄は、僕らと一緒に埼玉に戻った。「飛び跳ねる兄」の旅によって、西の詩人の力が呼びさまされ、東の獅子舞師が召喚され、「座る弟」にもまた様々な出会いと再会がもたらされた。その結果、災害の余波によって混乱させられた世界で、異次元をめぐる旅を生み出した。

まさに「知的障害のある中年男性が失踪し、警察に保護され、家族が迎えに行きました」で片づけられる話だ。ただ、それに収まらないものを感じさせられる、そして様々な人々によって語り、反復されるこの出来事の中に潜む、この流動する無定形な力こそ、信じていたい。同じことはできないし、またシステム化もできないだろう。だからこそ、この出来事を語ることは面白く、また生きることの神話性（というか、神話論的構造）すらも感じさせる。

3、螺旋

3-1 管理社会批判の陥穽

R氏の失踪という行為が、ウィルス・メールのように他者に感染していく。結果、周囲の人々の活動のプログラムが書き直されていく。同時にR氏の活動のプログラム自体も書き直されていく。そもそも、R氏の失踪という行為自体が、沿線火災による交通システムの不全という外的環境によっている。

この経験を、例えば管理社会が用意する諸システムに対する抵抗であるとも記述可能である。実際、お金がなければ移動させてもらえない交通システムや、タッチした瞬間にいつどこにいたかを記録されてしまうICカードによる認知システムに対して、無銭で自動改札を突破するというR氏の行動は抵抗を試みているという言い方もできる。

しかし、そのような記述は、一方でR氏が起こした個人の意図を超えた力や、多元的な現実構成の意味の可能性を捨象してしまう。同時にそのような記述は、彼はそのような意図で行動を行えるはずはないという批判を胚胎することになる。

3-2 右足のひざの外側の擦り傷

空白の一日は、興奮気味の解釈過程を完結させようとしなない。私たちの母は失踪の後次の様に語る。

R氏の一人大阪行きを、何人かの人が語っている。事実と事実から「想像」したことと。なべていい人たちとめぐりあえて無事帰還、みたいな感じだが……。一番好きだった「事実からの想像」は「兄が弟夫婦を心配して大阪まで来てくれた」だったよ。

R氏が帰ってきたとき（…）右足のひざの外側

には 赤くはれた大きなすり傷があった。世の中 優しい人もいるけど、傷つける人も 優しくない人もいるさ。語られないことの中にも真実はあるってことを 語らない側はどうつたえられるんだろう⁽⁶⁾。

3-3 「意図的／偶発」という分類以前の行為

重要なのは、R氏の旅の重要な部分が見えていないということである。擦り傷の生々しい現前（アクチュアリティ）が胚胎するように、周囲の人間からの解釈は決定的なところで中断される⁽⁷⁾。

ここに重要な問題がある。＜失踪する＞という行為が、問題行動として切断されるのではなく、本人やそれに巻き込まれた人々の世界とのかかわりを思わぬ形で書き換えていく。そのことによって生まれた世界に対する解釈は、決定的なところで中断されて完結しない。ただありえるかもしれない世界に対する想像力を喚起する、この螺旋状の運動をもたらず流動的な力こそが、私たちが考えなければいけない力のように思える。

環境との接触を通して、様々な人と物と即自的に接合し、即自的に切断されながら、われわれは不断に変態していく。それはもはや自閉症者や知的障害者の生の特異な有り様ということではなく、まさに私たちの生きるということ、そのものではないだろうか。例えばこの論文を書くために、たまたま手に取った論文がアイデアを与え、かかってきた電話に應對する中で別の事柄に頭を働かせる。尿意を催してトイレにいけば、窓に映る景色に心を奪われ、ソファーを見て眠気に誘われて、しばしの仮眠をする。私たちの生の有り方自体が、世界との接触において外側に無限に開かれていく契機と同時に、内側に閉じ籠る契機にも開かれている⁽⁸⁾。にもかかわらず、私たちのこれまでの語りは何かの行為が、明確な意図の下に行われているという枠組みを維持している。それを超えざるに、実は生き生きとした世界が現れ

る。

この旅について語ろうとすると、そんな想像力を刺激される。

4、終わりに：「意図／偶発」と言う分類を揺さぶる

「意図・偶発」という分類以前の行為によって、既存の世界に裂け目が生まれる。ここに日常的現実の根源的な不安定さと共に、別種の世界の有り様が垣間見られる。その隙間にこだわりながら、記述を続けることがひとまずの人類学の役割であろう。その上で、そこに現れる＜組織化のようなもの＞を、如何に理論として昇華できるのかを示せるか否かにこそ——それはそもそも＜社会変革＞というもののイメージそのものを書き換え、説得力をもって提示することにある——、人類学の存在意義を考える重要な鍵が潜むように思われる。

註

- (1) 本稿は、＜北＞の思想が遅れたもの、まずしいものとして切り捨ててきた、＜南＞の思想の価値を一貫して探求してきた勝俣誠の情熱に連なり、西洋近代がもたらした、われわれの思考すらも支配してきた＜理性＞中心主義を批判するものである。
- (2) 個々人の「障害」を治療や訓練により軽減・克服することに力点を置いた医療モデルは、「障害」をあってはならないこと、あるいはできればないほうがよいものとみる。現にあるものを受け止めないこうした見方に対しては、ずっとけんかをしてきた。ではもう一方の社会モデルはどうか。「障害」は社会の壁によって生み出されるのだという見方に立ち、現にそこにあることを必然ととらえる。いわば社会の鬼っこ

である障害者が社会の中で自立生活の権利を闘い取ることと併せて、社会の壁を社会自身が除去してゆくことを最も重要と考える。大筋でいえば、わらじの会はこの社会モデル路線でやってきたように思える。だが、これもどうもしっくりこないのだ（傍線筆者）。昔からわらじの会のよき助言者である障害者・八木下浩一さんの口ぐせを借りれば、「かっこよすぎる」のだ、社会モデルは。（中略）たぶん社会モデルは欧米の障害者運動由来なので、個人対社会という構図に立っているのだ（山下2010：12）。

自立生活、自発性、自己決定…、それらは重要な契機ではあるが、私たちはそれをめざすべき理念とは考えない。地域の中にすでに編みこまれている依存関係や排除・差別の関係の中に、同時にはらまれているものだ。だから、理念化してしまうと、孤立生活、根なし草、自己責任に追いやられる。創り出すのではなく、編みなおす。地域で生きるということは、やはり闘争（ふれあい）である。（山下2011：25-26）

なお山下の問題意識を踏まえてストリートと障害者の問題について、「迷惑」がもたらす可能性を考察したものとして、（猪瀬2011；猪瀬2013）がある。

- (3) 朝日新聞デジタル2014年13時2分「東海道線・山手線が運転再開 JR 有楽町線駅前で火災」
- (4) 1月3日世田谷の祖母の下に新年のあいさつに行った後、浦和に戻り伊勢丹の食事処で夕食を楽しんだ後、書店で夫婦して本選びに夢中になっている間にR氏がしびれを切らし自由行動に、今夕、R氏は無事、大阪で保護されました。<http://blog.goo.ne.jp/fwic3195/e/ad58b18bb9e4b3de8559a26ff302c>

3e5

- (5) 当日の彼の twitter @KOMADORISHINE33
によれば「いやはや…この関西ツアー、予
期せぬ凄い展開になってきた。西成の宿に
R氏といっしょに泊まることになるとは人
生というか運命というやつが最近オモシロ
過ぎる」とある。
- (6) のらぺんのページによろこそ ねくすと
<http://geocities.yahoo.co.jp/gl/norapen07>
- (7) アクチュアリティをめぐる議論は、精神科
医木村敏の議論を手掛かり展開される文化
人類学者石井美保の議論を参照した。
「ポゼッション」という概念によって導
かされる憑依の解釈について考えてみよ
う。先に述べたように、ポゼッションと
いう概念の背景にあるのは、健全な状態
において自己の総体を占有している意識
的で総合的な人間主体の存在である。こ
うした人間主体のあり方を本質的なもの
とみなした場合、霊的存在による自己の
支配・占有と「私」の消失を意味する憑
依は、人間にとってきわめて危機的であ
り、逸脱的な事態としてとらえられる。
このような事態は社会的存在としての人
間の危機であり、ひいては社会全体の安
寧を揺るがせる契機にもなりかねない。
したがって社会は、自己ならざるものに
占有されることで自己へのコントロール
を失い、全人格的な危機に陥った者を日
常的秩序の中にしかるべく再統合し、彼／
彼女の自律性と主体性を回復させる必要
がある。(石井2007: 235)
- (8) 以上の記述について、(千葉2013) から着
想を得た。しかし千葉の議論には、現実か
らのさらなる問いかけが必要のように思え
る。

参考文献

- 猪瀬浩平2005「空白をうめる：普通学級就学運動
における「障害」をめぐる生き方の生成」『文
化人類学』、70 (3) 309-326
- 2008「他者と出会う場所：障害者の地域
生活運動の正統的周辺参加論による検討」
『カルチュラル』2 (1) 95-108
- 2011「方法としてのストリート：管理社
会における自律した生存基盤の創造にむけ
て」『PRIME』34 : 81-88
- 2013「オルタナティブな働き方／暮らし
方」『現代思想』41 (17) : 210-217
- 石井美保2011「呪術的世界の構成：自己制作、偶
発性、アクチュアリティ」春日直樹編『現実
批判の人類学：新世代のエスノグラフィへ』、
pp.181-202：世界思想社
- オリバー、マイケル2006『障害の政治』三島亜紀
子他訳：明石書店
- 杉野昭博2002「インペアメントを語る契機：イギ
リス障害学理論の展開」『障害学の主張』石
川准＋倉本智明（編）、pp251-280：明石書店
- 千葉雅也2013『動きすぎてはいけない：ジル・ドゥ
ルーズと生成変化の哲学』河出書房新社
- わらじの会1996『生活ホーム・オエヴィス報告書
PART II 「おらっちの生活は自立つつの
になってかい』：千書房
- 2010『地域と障害：しがらみを編みな
おす』：現代書館
- MORRIS, Jenny1993 *Pride against Prejudice:
Transforming Attitudes to Disability*. The Women's
Press.
- SHILDRICK, M and J. PRICE
1996 'Breaking Boundaries of the Broken Body' *Body
and Society* 2 (4) : pp.93-113